

---

# 崖に棲む猫

湯たぽん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

崖に棲む猫

### 【ZPDF】

Z6987R

### 【作者名】

湯たぽん

### 【あらすじ】

猫は、たまに何もない空中をじーっと見つめて動かない時があります。

一体何を見ているのでしょうか・・・？

(前書き)

若干のホラー要素を含みます。  
苦手な方は「」注意ください。

・・・何してんだいアンタ。そこは危ないぜ。

オレの呼びかけに応じて、その女は振り返った。

キレイな黒髪を伸ばした、暗い印象を受ける女だ。まあもつとも、  
オレの所に来るヤツってのはたいてい暗い顔をしているがね。

ちなみにオレもぐらーい黒だ。黒猫だから当然なんだけどな。  
オレはこの岬に住んでいる。こここの切り立つた崖には滅多に人は  
来ないが、たまにこんな暗いヤツが現れる。  
ヤツらの目的は・・・まあ目を見れば分かるが。

今日は空まで黒く曇っていた。女は小さくて黒いオレを見つけられず、少しの間辺りを見回していた。

暗く、しかもごつごつした岩だらけの崖だからなかなか見つから  
ないだろ? な・・・

そして岩の上でじっとしているオレを見つけると、はじめて少しだ  
け微笑んで、声をかけてきた。

「・・・おこで。お菓子あげよつか」

オレはそんなモノは食わないが、女はオレを受け入れてくれたようだ。

足もとまで走り寄つて、オレは女の田を下から覗きこんだ。ああ、やっぱり・・・。

田を覗きこまれて、女はお菓子の事も忘れオレを見返してきた。

「キレイだね、あなた。

・・・私とは大違い」

そうこうと、恥じるよつて田をそらした。

ふいに強い風が吹き、女の髪とコートをバサバサと乱した。彼女が髪を直している間に、オレは少し離れた大きな岩の上に移動した。

今度はオレをすぐ見つけると、女はポケットからクッキーを出してきた。

「こっち来て、もう少しお話しようよ。

あと・・・ほんの少しでいいから」

「冗談じゃない。この世で最後に話した相手がオレでした、なんてたまらないぜ。

オレは女に近付いた。一步前に出てしゃがみ、背中をなでようとするとのをヒラリとかわして、また岩の上に戻る。

「?」

避けられて詫びながらも、女はまた一步、近付いてきた。

「どうしたの? 私なんて・・・嫌い?」

また自虐に走りをつくなるのを、少し近付いて止めてやる。

オレは近付いては離れ、 またちよつと近付いて逃げをくじ返し、 女を崖から連れ出した。

住みかのすぐ近くにあるこの崖は、 普通の大きな道路からちよつと離れるだけの場所にあった。

女を崖から連れ出すと、 道路の向こうにまばたきバスが止まっていた。 田舎のバスつてのはたまに妙な待ち時間があるもんだ。 運転手も降りて一服していた。

そんな風景を田の前にして、 女の田に迷いが生まれるのをオレは見逃さなかつた。

女がぼうっと町を眺めている隙に、 ついやへやへオレはクッキーを受け取つた。

「あつ・・・」

なでる事ができずにクッキーだけ奪われて、 女は少し恨めしげにオレを見た。

オレもまた目を見返した。

しばらく田を覗きこんだ後、 今度はバス停の方を向くと、 近所のオバちゃんが手招きしていた。

地元の主婦が、 使いもしないのにバス停でのんびりくつろいで、 自分で勝手に名前を付けたネコと戯れる。 絵に描いたような田舎だな、 ここは。

オレに釣られてバス停の方を向いた女は、 自分が呼ばれたのかと思つたのだろう、 慌ててうつむきロートのえりに隠れるように小さくなつた。

オバちゃんに呼ばれたオレは、 クッキーをくわえたままバス停の方へ走った。

「あ、待つ・・・」

また女の小さな声。

オレは一度振り返って女の目を覗きこむと、 またバス停のオバちゃんに走り寄った。

クッキーを口から放すと、 オバちゃんはオレをなでて言った。

「こらにちは、 クロちゃん。 クッキーくれるのかい？ ありがとうねー」

なでられながらもつ一度、 オレはの方を見た。

・・・ 戻りなよ、 自分の場所に。

死にたい理由など分からないがアンタ、 戻れる場所があるつちはここへ来るべきじゃない・・・

オレの鳴き声の意味などわからないだろうが、 女の目から迷いが消えた。

もう、 大丈夫だな。

女がゆっくりとバスに乗り込んでいくのを横目に、 オレは大きなあくびをした。

適当にオバちゃんをからかつた後、 オレはねぐらで奥へ戻ることにした。

崖の近く、 住みかまであと少しつとじらでオレは足を止めた。

暗い空を見上げると、 何ががふよふよ飛んでいるのが見えた。 崖の向こうの海からぼんやりとした光を放ちながら浮き上がってきた。 頼りない動きで、 のろのろと。

ソイツはしばらくあたりを漂つた後、 オレのほうへ近付いてきた。

誰かがオレの中に入つてくるのを感じる・・・ そうか、 今日はフタリいたんだな・・・

女の方にかまつている間にむづヒトリ来てたのか。

ソイツの魂は後悔と悲しみで真つ黒になつていた。 オレ、 また黒くなつちやうな。

目の前まできたソイツを、 オレはぱくんと飲み込んだ。 暗い感情がオレの中に入り込んでくる。

- ・ ・ ・ そつか、 アンタ相当地辛い日を見て来たんだな。  
しばらくオレの中で休んで、 できるだけ早く成仏しなよ・・・  
オレの中のソイツに語りかけると、 オレは住みかの岩穴へ入り込んだ。

今日はフタリ、 か・・・  
ヒトリは戻り、 ヒトリは魂になつてオレの中に入つちまつた。

「うつて今までに何人、 」の崖に来るヤツを見たか分からぬ。

時々、 」こんなコトやめへれつたと往みかを変えひまおつかとも思  
う。  
でも・・・

昔オレを愛してくれていたアイツの魂は、 まだオレの中で眠つて  
いる。

オレのカイヌシだったアイツの苦惱は、 まだしばらくは晴れないだ  
るう・・・  
こいつしてオレが自殺したやつを助けたり魂を休ませてやつたり  
して・・・本当にそれでアイツの魂は休まるんだろつか。

・・・ま、 いいか。

オレは考えるのをやめて大きくノビをした。  
休みたいヤツには休ませてやればいい。  
ネコだつてヒトだつて、 魂になつちゃつてもそれは同じだ。

もひしづびび、 ノコにこてやるか・・・

そつ締めくくると、 オレはあぐびをして。

何年か前に死んだオレの骸の横で目を閉じた・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6987r/>

---

崖に棲む猫

2011年10月8日21時35分発行